湘南学園だより

No.100

発行
湘南学園
学園だより
編集部

「創設者の願いを現世に顕す」

理事長　中川　一省

本年2月から5月15日にかけて鵠沼市民センターにて「鵠沼村の時代　なつかしき学び舎」と題して、湘南学園の設立当初から現在に至るまでの歴史が展示されていました。

昭和8年、ほんの数人の児童と教師によってスタートした学び舎は、その後73年の歴史の中で、関係者の尽力により、幼稚園から高校までの園児、児童、生徒数は、1900名を超え教職員数も160名を超えるスケールの学校に育んでいただきました。

その間、徹底して貫かれたことは、オーナーのいない学校として「保護者と教職員とが共同運営していくこと」でした。現代社会において「共同運営」というと、双方にメリットとなることだけを追求し、そこに執着してしまう一面がありますが、教育の場でその運営には、肝心な子供が不在となる危険があります。

創設者はそこを懸念したのでしょう。学園に通う子供を「共に見守り育む」との不変の命題を遺しています。この「共に」とは「お互いを敬いながら、融和の中に子供中心の運営を推進すること」と私は解釈しています。ともすれば子供を間に挟んで対峙し合うことが、これまでの学園の歴史上さまざまな局面でありました。子供を教育する使命、義務を持つ双方であればこそ、対立から対話へ、そして和の融合を持って「見守り育む」ことを、私の所信表明の第一とさせていただきます。

●百年先を見つめての根幹を築く

私立学校法の改正を受けて、当学園もほぼ1年かけて、学校運営の憲法ともいうべき寄附行為を変更しました。この側面は、まず既成の寄附行為を法的な実務を弁護士、組織構成及び運営実務の側面を外部学識経験者に精査してもらうことから始めました。

いわゆるシンクタンクの確立です。

理事会では、それぞれから提出された意見、提案をフォーマットとし、組部まで検討、論議し、県知事の許可を経て、成立させるに至りました。

現在、この学園には、学事を含めた運営業務を推進するにあたっての規約、規程類が20以上あります。それぞれが整合し連動していかなければならないものですが、登記、成立の時代背景、時間差等を考えますと、前述した手続きを踏み、すべて精査、検討するべき時期にあると考えます。

時代は、少子化傾向がますます強くなり、経営破綻、廃校へ追い込まれている学校も少なくありません。

まして本学園のような私立学校は、広範囲な地域住民からの厳正なセレクションを受ける立場にあります。

この先、百年、湘南学園がさらなる繁栄を続けていくためには、まずその根幹ともいうべき経営基盤をより強固なものとする必要性を強く感じております。

●学園人として慈愛あふれる貢献を

学園には、先人が示した建学の精神があります。

「個性豊かに、身体健全、気品高く、明朗で実力があり、社会の進歩に貢献できる有為な人間の育成」

というものです。

藤岡学園長は、ここに「世界に通ずる良識ある市民をつくる」という教育コンセプトをプラスしました。

年々、国際化、情報化等、多様化する社会に対応できる子供の育成は、現場を預かる教員も日々研修が必要とされることであり、その苦労には、深謝するばかりであります。

もちろん、これは、各ご家庭においてのご協力が無くしては、実現不可能なことでもあります。

特に、「気品高く」は、学校評価のの質の部分であり、偏差値の高さや校舎の新旧にかかわらず、昔からの学校選びの絶対的基準である「善意に満ちあふれている」かどうかに、その基調はあります。

保護者と教職員とが相互に努力し、善意を拡め、高めていけば、子供たちは自然にこの建学の精神も身についていくと固く信じております。

今後、学園は、念願であった小学校建設へ向けての具体的計画を実施していく時期を迎えます。全学をあげてのご協力を切にお願い申し上げます。

最後に、湘南学園の理事長は、私で十九代目とのこと。多くの先輩のご努力に敬意を表しつつ、任務遂行させていただく所存です。

二人のリーダーへの謝辞

湘南学園学園長　藤岡　貞彦

今年春、3月末日、薗田貞美学園理事長と近藤正隆中高校長のお二人が、任期を終えて、当学園を去られることになりました。

薗田理事長は、P・T・A会長のあと、二期四年間、法人の長の職に、近藤校長は三十五年間の在勤中、二年間校長の職にあられ、学園運営に尽瘁されました。創立七十周年の前後、学園の転換期に、おのおの法人と学事の長をつとめられ、多大の業績をあげて、学園を後にされました。

お二人の偉大な足跡をおもい、学園長として、一言謝辞を申し上げます。

私は、2004年4月の着任以前、前年の12月に、お二人から辞令の内示を頂戴した折、はじめてお目にかかりました。その場で、薗田理事長から次の四項目の要望を示されました。

① 授業の完全な父母への公開
② 点数だけで退学させるシステムの改革
③ 大学への推薦制度の透明度をたかめる
④ 学園財政の透明性を確立する

着任以来、私はこの四項目を忘れた日はありません。着任後二年間、折につけ努力はしてきたつもりですが、お約束はまだまだ果たせないでいます。心苦しいかぎりです。私の在任中、皆さんとご一緒になんとか一歩でも、前進するつもりです。

この四項目を理事長が、出会いがしらに提示された時、私はいかに難問がこの学園に山積しているかを示されたおもいがしました。

もちろん、学園長まかせ、というのではありません。たえず、的確な指針を提示され、積極果敢に理事長自身が、学園改革にとりくまれたことは、衆目の一致するところでしょう。折りしも、私学法改正が施行され、理事長と理事会の責務が明示されることとなった追い風をうけて、法人・理事会の指導性は次第に明確なものとなってきました。とりわけ、学園財政の透明度をたかめるために、生徒・保護者への説明責任を重んじることを求めつづけられたことは、特記すべきことでした。

なかでも、学園の憲法といわれる「寄附行為」の改正が確定したことは、学園の将来を指しめしたものとして、後世への道標となったと思われます。P・T・A会長・理事長職としての長年のご献身に、あつくおん礼申しあげます。

私の着任の前、半年にわたって学園長代行をつとめられた近藤前校長のご労苦は、着任以前からよく知っておりました。当学園には、積年、トップ・ダウンのシステムが根を張っており、このシステムをつくりかえ、学内融和の道を探っていかれるご苦心は、なみたいていのことではなかったでしょう。

どのような境地にあっても、先生は温顔を失わず、窮境打開の方策をとられたことと拝察しています。中高の運営にとどまらず、学園内での運営協議会の創設や地域への学校の開放、卒業生への配慮、教員の自己責任の確立など、学園史に新風を吹きこまれました。三十五年の長きにわたり、こんなに生徒諸君にしたわれる先生がおられたのかと、感嘆することもしばしばでした。

創設以来七十年にして、大きな転機に際会した湘南学園が、転換期にふさわしいリーダーの下に結束し、「すべては子どものために」のスローガンをかかげ、スクール・デモクラシーの道をすすむことになりました。

学園の恩人たるお二人に、深い敬意とおん礼を申しあげる次第です。

感謝

薗田 貞美

5月は、新緑がまぶしく四季の中でも爽やかで過ごしやすい季節です。子ども達にとっても新しい環境になじみ生き生きしている事と思います。法人及び学校に於いても新年度の体制が決まり、新しい風が吹きこみ、今まで以上に魅力ある学園になる事を期待しています。

学園の魅力は、法人として保護者の意見をどのように反映させるか、また、学園長を中心に学校としてどのように魅力ある学園を創りあげるか、車の両輪のようにバランスよく2つの意志決定機関が動き、常に努力し続けている事だと思っています。「いつものように」とか「今までどおりに」との考えは思考停止になりがちです。藤岡学園長は、就任当時よりまず傾聴から始まると述べていらっしゃいます。湘南学園の運営は一部の人だけでできるものではなく、関係者の協力と一人でも多くの参加意識の高まりが必要です。子供達の事にとどまらず、PTA活動から法人運営まで皆様の関心を高め行動していただきたいと思います。何度も皆様の中に大きな力として潜んでいるよりよい学園にしたいとの思いを実感しています。

6年前、私も学園の運営に関わるとは思いもしなかった保護者の一人でした。総会数日前にPTA会長の推薦を受け1年任期のつもりでお受けしました。その後、今年の3月までの2期（4年間）理事会の代表として学園運営に携わった事は、不思議な運命であったと感じています。この間、無事に任期を終えられたことは、理事はじめ皆様のご協力によるところが大きいと感謝しております。法人の新執行部が中川理事長を中心に多くの前理事の方々が引き継がれる事が決まり、今後も基本的な学園の進むべき道は変わらないと考えています。

この4年の間、私の中では自然な流れの中で運営でき、PTA会長の経験があらゆる決定に迷いなく動く事ができました。また総会を通して、多くの学園関係者が運営を一部の人に委ねたまま、実態を理解していないと感じました。当時、PTAの執行部と保護者及び教職員とのコミュニケーションギャップは、法人を筆頭にいろいろな場面に存在し、このギャップの解消には情報の共有化が一番良いと考えました。法人運営が合議制で進めていく事からも、正確な現状把握と共通認識の上に判断が下されなければなりません。その意味で「学園だより」だけでなくできる限りの情報は発信する事が大切であり、一層の努力が今後も求められると感じています。

まだ、学園には変えていかなければならないところもありますが、「青い鳥」を見つけるように、学園には守っていかなければならないところも多くあります。是非、今後学園の皆様に学園長が提唱された学園の「ルネサンス」を実現して、守って行かなければならないものを見直し、子供たちの為に学園が提供でき、共有できるものを再発見していただく事だと思っています。

学園とのかかわりは私にとって大変貴重な経験でした。先に皆様に感謝の気持ちを伝えさせていただきましたが、言葉では言い尽くせないものです。支えて頂いた皆様のご支援が一番嬉しく私の原動力になりました。あらゆる場面で厳しい決断を求められましたが、結果として形が現れた時や皆様から期待を寄せられていると感じた時、おおきな喜びを感じられました。学園の中でその機会を与えて頂いた事に感謝します。

今後の湘南学園の発展は、皆様の学園に寄せる思いの大きさによって決まります。大いなる思いを学園に寄せていただき、更なる発展を期待します。ありがとうございました。

感謝と期待

近藤　正隆

この3月末をもって、私は湘南学園中学・高等学校の教員を卒業しました。私にとって、教員とは生徒を注意し、教科内容を教える仕事で、生徒であった時にはとても遠い存在でした。ですから、教員になるまでは教員になるだろうということは考えたことがありませんでした。叱ったり、説教することが苦手ですから、自分には向いていないだろうと思っていました。ところが、ふとした切っ掛けで教員になることが決まったときに、教員になったら生徒の良い面を見い出し、できるだけ生徒と一緒に遊んだり、勉強したり、旅行に行ったりすることのできる教員になりたいと思いました。思っていたことができたと言うのではありませんが、教員に不向きな私が35年以上の長きにわたって教員を続けることができたのは湘南学園だったからではないのかと思っています。

湘南学園は自由で、伸び伸びとして、明るい学校です。私のように教員らしくない教員を受け止めて、教員をすることの楽しさを教えてくれました。教員に成り立ての頃に出会った生徒とは、スキーに行ったり、旅行をしたり、行事を楽しんだり、ともかく思い出すのは楽しかったことばかりです。その後沢山の生徒と出会いましたが、誰もが前向きで、一緒になって学園生活を過ごそうとしていました。担任になったときに、できるだけ学級通信を出して、いろいろな提案をクラスの生徒にしました。そのような時には、生徒がバックアップしてくれたから実現できたのです。私は、学校とは将来の担い手を育てる役割を持っていますから、これまで通りにすることはないと思っています。新しい時代で活躍できるようになるために、新しいことができるようになっていた方が良いのです。私は湘南学園には自由にいろいろなことをチャレンジできる教育環境とそれを支えてくれる生徒がいると思っています。だから、私なりにやりたいことができたのだと思っています。

しかし、いつしか私の置かれている立場に変化がおきていました。担任にもならず、また担当する授業の時間数が少なくなっていきました。こうなると、生徒諸君から見れば遠い存在と言えると思います。私は生徒から離れた存在になるに伴って、また年を重ねることで、教員をしていたいという気持ちも弱っていきました。やれるところまではやるとしても、自分なりのやり方を通したいと思ったのです。湘南学園の建学の精神には教育の理想があると思うのです。生徒の個性を尊重し、明るく元気に育てるために生徒のもっている長所を伸ばすことの大切さを唱えています。それには、生徒のことを知ることが必要となりますので、教員は常日頃より生徒と接し、係わりを持つようになっていなければなりません。その係わりを持てなくなっている私の役割をあらためて考えてみることもありました。

一方、湘南学園中学・高等学校では、昨年12月の教員会議にて中学生の段階では成績や欠席日数により進級させないという制度を廃止することにしました。これは湘南学園がかかえていた問題を解決することに踏み出したと思っています。これをさらに進めることには大変難しいこともあると思います。しかし、教員間でよく話し合って、生徒のことを考えたときにどのような方法をとったら良いのかをぜひ考えてもらいたいものです。どの生徒にも長所もあれば、短所もあるものです。教員とは生徒の可能性を、係わりの中で見い出すことが大切な役割です。長所を伸ばすことができれば、すべての生徒が持っている希望をかなえることもできますし、湘南学園の発展もあると思っています。ぜひ、藤岡学園長、古市中高校長、小山小学校校長、渡辺幼稚園園長の下に教員・職員ともに一丸となって、学園教育を発展させるようによろしくお願い致します。

最近の幼稚園から

幼稚園長　渡辺　礼子

学園幼稚園では、専門の講師による音楽指導を行っています。PTAバザーの収益金で購入させていただいた和太鼓も取り入れて、楽しくにぎやかに進めています。和太鼓は、小手先でたたいても良い音が出ないので、子ども達は正座をして練習しています。まず、きちんと正座をして、手をついて「よろしくお願いします」とご挨拶してはじまります。床に手をつくと、お尻がピョコンと上がって、なんともかわいらしい姿です。太鼓は十台ぐらいしかないので、順番でたたきます。残りの子ども達は、床に雑巾を敷いて（バチで床を直接たたくと床が凹んでしまうので）、トントコたたいて練習しています。

この音楽指導では、子ども達に、「目で見る」「耳で聞く」「頭で考える」ことを意識させることも目指します。たとえば、「目は何の為にあるの？」と訊ねても、答えられない子どももいます。太鼓をしっかりと見て、他の子どもと音を合わせるために「耳で聞いて」、先生のお手本どおりに打つことを「頭で考える」という作業を、子ども達は自然に行っているのです。その意味で、和太鼓は、良い教具といえるでしょう。

また、最近は、日常生活で正座をする機会は少ないと思いますが、子ども達は、頑張って正座に挑戦しています。正座をすると、子ども達の背筋が伸びて、集中力が増していることがわかります。きっと子ども達も、きちんと正座をすると、良い音が出ることを体感しているのでしょう。

指導の終わりに、「ありがとうございました」と手をついてお礼をいうまでの45分間で、音を楽しむと同時に、バチさばきの形を覚える、難しいリズムをこなすなど、少しずつ自分が上達していることが分かる喜びが、次の太鼓の指導を待つ楽しみにもつながります。

さて幼稚園では、三歳児保育を始めてから五年目に入りました。今年は、皆様のご要望に沿えるように、三歳児クラスを一つ増やして、二クラスでスタートいたしました。

三歳児は、母親から心身とも独立し、自我が芽生えていく大切な時期です。子どもは自己中心的な行動を、多くとりますが、それは、第一反抗期に入ったものもあり、自分は今何をしたいのか、自分のしたいことを邪魔しているのは誰なのかが、分かるようになってくるのです。そして、それを追求し自己主張の形で表れてきます。その一方で、同年齢の子どもとの生活も、日頃のクラスの活動を通して、楽しめるようになってくるのもこの頃です。体力。性格。社会性などの基礎が出来上がる三歳児の保育はとても責任が重いことと思っています。

子ども達にとって、初めての集団生活ですので、子どもの精神的な安定感を第一に考え、幼稚園を家庭と同じような場所と思えるようにひとり一人に母親のようなきめ細かい対応を心がけています。

今年の春入園した三歳児の子ども達も、新しい手作りのカバンが背中に馴染み、四月にはこわごわくぐっていた幼稚園のトトロの門も、最近では、勢いよく歩いてくる姿が見られる様になりました。自分の靴箱や、ロッカーの場所も覚えて、保育室での朝の支度も、だいぶスムーズにできるようになりました。

クラスでは、先生と一緒にいろいろな体験をすることを通して、あそびの種類を覚えていきます。また先生が橋渡しをすることで、友達とのつながりも生まれてきます。

当然のことですが、他の年齢のクラスに比べると、先生もより細やかな保育をしますし、人数も多く必要です。先生は、遊びを盛り上げる、泣いている子やトイレに行く子のお世話をする、さまざまな子どもの要求に、臨機応変に応えていかなければなりません。当学園では、一クラス三名の保育者がみています。子どもたちの気持ちを受け止め、たくさん遊んで、次の日も幼稚園に来ることが楽しみになるようなクラスを作ることができる充分なスタッフ体制を組むことができています。

来年度は、三歳児クラスがもう一つ増えて、三クラスとなります。これは、当園で、一番クラス数の多い学年になります。子どもたちの三年間の育ちをどのように導き、日々を積み重ねていくか、カリキュラムにおいても、さらに工夫を加えていかなければならないと思っています。また、施設面でも、この春三歳児が使えるように、さまざまな改善を加えてきました。トイレは使いやすいようドアをなくしたり、保育室の出入り口に縁台をつくり、靴を履きやすくしたり、雨よけの庇を付け、送迎の際お世話がしやすいようにしました。この夏休みにも、保育室の工事を予定しています。

三年間の園生活をとおして、子ども達の成長が促せるよう、新たな保育体制のもと、しっかりと取り組んで参りたいと思います。

『いっしょに遊ぼうね』のハートのバッジ

幼稚園保育主任　青木萬里子

四月十日は始業の日。年長のさくらさんと年少から進級した二十人のすみれさんが登園して来ました。お家の人の手を振り切り一目散に走って来ます。「○ちゃんよろしく！○○先生です」のことば掛けに緊張していた面持ちも笑顔に変わります。早速、さくらは自分が過ごした部屋の遊具がどうなっているか、貼られたシールに刷染んだ絵柄や知っている名前があるかなど、友だちと連れだって意気揚々と幼稚園中を見て回ります。場所や状況の変化を確かめている姿から、年長児になった喜びや意気込みなどが伺えます。一方、進級初日のすみれの部屋では、緊張した気持ちが引き合ってか保育者の周りにこぢんまりと寄り合っていて、一年の成長の差を感じさせます。さくらさんが「ももさん、今度この部屋なの？」と声を掛けると「だってもう、もも組じゃないもん。」「すみれになったんだよ！」と、勢いよく返事をするすみれさんに大変身。さくらさんに元気を引き出してもらった一瞬でした。入園式までの三日間は、さくらさんは、会場準備や、プレゼント作りをするなど『年長組』を自覚する日となります。今年は年中の時にさくらさんから折り方を教わったハートのバッジです。さくらさんと遊んだこと、教えてもらったこと、ご馳走してくれたこと、そしてどんなさくらさんになりたいかなど友だちや保育者とおしゃべりしながら、ハートの形に折り上げていきます。裏には『いっしょに遊ぼうね』『友だちになろうね』とその子の気持ちが書き添えられました。十三日は、入園の日。年少もも組（二クラス）四十人、年中すみれ組（二クラス）五十六人を年長さくら組（三クラス）の八十三人が、ひとり一人に湘南学園幼稚園の仲間になった印のこのハートをプレゼントしました。　沢山のお友だちと遊び関わる中で、それぞれの持ち味がぶつかり合いひとり一人の心に認め合う心や思いやりの心が育ち合っていきます。出会いが宝ものになることでしょう。

入学式

教務主任　鈴木　努

今年も、入学式を行いました。学園小学校では、毎年、対面式の入学式を行っています。

その特徴は、入学してくる一年生を二年生から六年生までの全校児童が対面し、お迎えすることです。参加された保護者の方々の中には、式そのものが多少長めに感じられたかもしれませんが、一年生を全校児童で迎えて、歓迎することを最大のねらいとしています。

最初は、六年生が、一年生の手を引いて式場に入り、一年生を壇に座らせてから、自分たちの席に戻ります。

いつものことですが、一年生に比べ少し照れながら六年生が入場してきます。

一年生よりも、緊張した面もちが、まわりの人たちの微笑みを誘います。

一年生全員が揃うと、全校児童が立ち上がり、校歌を歌います。その後、校長先生から担任の先生および担当の先生の紹介です。

それが終わると、今度は、担任の先生から、一年生全員をクラスごとに一人ずつ名前を呼んで紹介します。

最後には、六年生の掛け声で全員がコールをします。五四〇人もの「入学おめでとう。いっしょに遊ぼう、勉強しよう。」の声は、一年生にとって、とても大きな声援になります。

この声に励まされた一年生は、明日からも安心して学校に通ってきてくれるものと思います。

小学校

安心・安全への取り組み

校長　小山　良昭

安全は、社会全体や個々人が、自分や周りの人の命を尊重していくことを基盤に、自ら安全に行動することで実現していきます。

私たちは、児童の安全を守るために、以下のような取り組みとともに、不審者を学校の敷地内に入れない取り組みとして、警備員の配置と防犯カメラの設置をしました。また、保護者の方には、校内に入るときに身分証の携帯をお願いしました。その他、教室に防犯ブザーを置き、一年生に昨年度までは防犯ホイッスル、今年度は防犯ブザーを配布してきました。

今年度は、児童が安心して、安全に学校生活を送っていくために、「自分たちの安全や命は自分たちで守る」ことを重点に取り組んでいきます。自分の命は自分で守ることに目を向け、自分の命を守ることは周りの人の命を守ることにつながることを理解し、行動して確かめていきます。児童の命を守り、児童が安心して安全に学校生活を送るためには、教職員だけでなく、児童自ら意識すること、保護者の協力が必要です。保護者の方には、様々な形での協力をよろしくお願い致します。一つひとつの取り組みを通して、意識して行動していきましょう

①新入生交通安全教室

藤沢市や藤沢警察の協力を得て、毎年四月におこなっています。今年度は、保護者の方も参加しました。

②機関別下校指導

多方面から通学していることから、学期に一度、五月・九月・一月におこなっています。

機関別は、小田急線八グループ、JR六グループ、江ノ電二グループ、徒歩六グループの方面別に分かれています。方面別の仲間の顔を知り、日常から助け合い、注意し合えるようにしていきます。また、それは、いざ何かあったときに協力できる関わり合いをつくることにもなります。

③防災訓練

防災訓練は、学期に一度、五月・九月・一月に、防災引き渡し訓練を五月におこなっています。

防災訓練は、火事と地震を想定して、安全に避難できるようにするためです。また、煙体験、地震体験、消火練習を必要に応じておこなっています。

防災引き渡し訓練は、東海地震（又は藤沢市周辺大規模地震）警戒宣言発令時　および災害発生（自然災害・人的災害）時の緊急下校を想定し、保護者に児童の引き渡しをおこないます。

④通学路の安全確認と安全マップづくり

日常の指導や機関別下校の時に対応していますが、家族の取り組みを重点にしています。保護者の方には、安全マップに基づいた安全確認を必要に応じてお願いしてます。危険を回避するためにも、繰り返し練習することが必要です。

⑤下校の体制

登下校は保護者の責任ということでお願いしていますが、教員及び地域の方にお願いして、可能な限り取り組んでいます。

⑥一斉配信システム

昨年度までの電話連絡網を廃止して、一斉配信システムを導入しました。学校としての連絡、例えば「台風により休校」の連絡は、学校として、各家庭に一斉に配信します。これにより、伝言過程での捉え違いや留守家庭への連絡滞りが無くなります。

⑦教職員の取り組み

・救急法の講習会を毎年おこなっています。

・防犯訓練をおこなっています。

・必要に応じて、不審者情報のお知らせと多方面に分かれての教員引率の下校指導をおこなっています。

・安全点検をおこなっています。

⑧保護者へのお願い

・学園周辺に駐停車しての自家用車での送迎は、地域の方への迷惑ばかりではなく、園児・児童・生徒の安全にも関わりますので、固くお断りします。

・欠席・遅刻・早退及び寄り道の連絡は、児童手帳に書いて提出してください。電話での連絡は、仮の報告です。但し、事前連絡無く欠席や遅刻する場合は、朝のうちに必ず連絡してください。登校していなくて連絡がない場合は、安全確認のため、緊急連絡先に連絡します。

地域から学ぶ特別教育活動

中学校高等学校　校長　古市　好文

特別教育活動のスタートは１９９０年です。前年にカリキュラムが整備され、その後各学年ごとに、一定のモデルが徐々に出来てきました。17年目を迎える特別教育活動は、特性のある「進学校」と表明するにふさわしい歴史をもった教育です。当時、このカリキュラム編成に参画した私は、教育基本法の趣意に基いた人格形成を強調しました。文科省が総合学習を唱える以前の、そして日本ではまだ環境教育が根づいていない頃のことです。

１９９０年3月、高校二年生の修学旅行団が九州日田の山奥に入りました。進賀学園長をはじめ、引率の教員を含めた２００名近い集団の手によって、４０００本を越える大規模な植林を実施しました。これがＮＨＫをはじめ全国で報映され、新聞でも報道されました。現在の高校生たちが生まれた頃の話です。これを機にして、特別教育活動は、「学校の外」つまり地域社会に学習の場を求めて、開始したのです。

「学校の外」とは、校外という意味を含みますが、学校外の方々から学ぶということです。中一から高三まで、六学年の活動は、学校外の方々から学習の機会を得る、という点で共通しています。

特別教育活動の創生の時期は、バブル経済のピーク時にあたります。日本全体が投機気運となり、ある意味でうわついた風潮にあった頃です。この時期に、自然環境、生命の尊厳や人権など、時代課題を意識した教育を策定した意義について想起したいものです。バブルの崩壊と長い平成不況という事態、それを見透していたのかもしれません。

戦後、高度経済成長によって、日本では地域コミュニティがどんどん解体しました。それに代って企業コミュニティが形成されましたが、バブル崩壊後このコミュニティも解体しつつあります。そして、いちばん原点である家庭そのものも、解体し空洞化してきています。かつての伝統的な村落を基盤とした地域コミュニティに代わり、地域の概念も変化しています。日本、韓国、中国、東南アジア諸国、これらを包括して東アジア地域といいます。サヘル以南のアフリカ地域では、人口の増加や周期的な干ばつ、内戦などによって、各地で飢餓を引き起こしています。この間、新潟県の中越の地域では、集中豪雨、地震、豪雪に苦しみました。「東京のまち」といった場合、藤沢市もその地域に含まれます。さらにいえば、地球という人間と自然が共生するグローバルな地域が、地球温暖化防止に取り組む課題に直面しています。

「地域」はテーマや問題、そして課題によって拡がりをもち、他方限定性をもつようになりました。先進国と称される日本で用いられる地域概念は、日本自身にとっては、少子高齢社会であるとともに、成熟した社会にふさわしいコミュニティの形成が課題ですから、そこに着目していくことでしょう。人間らしく生きることと、地域社会が、相互不可分となると思います。

一方、『国際化』の一つとして、『カナダ語学セミナー』が実施されました。『英語』は、アングロサクソン系の言語でなく、国際共通語となり、生活用語だけでなく、概念によってコミュニケートする手段となっています。語学自体のスキル・アップも必要です。それと同時に、コミュニケーション能力を高めることです。そこに概念認識と、構造的分析的で、科学的な認識が要請されるはずです。文章読解や解釈能力は欠かせないことですが、自分の頭で概括でき、かつそれを伝達し表明する力、文章化する力こそが大切です。授業でもそうですが、この活動では学習する主体こそが「いのち」です。そもそも、学ぶとは学びあうことです。教師もそのことを忘れて、教え込むだけでは、生徒の学習主体形成をバック・アップできないと思います。特別教育活動で最も大切なことは、コミュニケーションです。取り組んだ成果や新しい認識もさることながら、失敗に至った理由を解明し、誤りがあった時にはそれを認め、向かい合うことです。意志疎通を図るコミュニケーションをめざして、活動に取り組んでもらいたいと思います。

特別教育活動は、地域コミュニティから学ぶ活動です。地域は、行政や民間企業、多方面で活躍されている人々だけでなく、そこに生きている人々によって形成されています。自発的意思、つまりボランティアの意思をもって活動している人々から学ぶことも忘れてはなりません。特別教育活動の基調は、まず身近な地域から学ぶことです。湘南学園は、近隣の五つの町内会・八百数十世帯の方々の避難地となっています。湘南学園もこの町内会員で、この五つの町内会の自治活動をすすめる組織が「五友会」です。去る5月12日（土）の午後、生徒会総務委員会のメンバーと「五友会」幹部の方とで懇話会がもたれました。史上初の出来事です。災害緊急時に、生徒諸君が何が出来るか、というテーマもあります。今後、様々な形で交流を深めてほしいと思います。

最後に、国際化への対応についてです。現在の特別教育活動は、生徒たちに、世界の人々と様々な交流を通じて、そこから学びとる機会を多角的に与えているとはいえません。教員自身が国際的な視野をもつこと―これがスタートでしょう。国際協調、とりわけアジアの国々との関係が重要であるという思潮は、各方面で顕在化しております。インターナショナリズムという観点で、国際社会を見つめる実際の場をどう設定するか。又、地球規模という意味でのグローバルな視点で、自然環境保護やそれとの共生、持続可能な発展など、様々なテーマへのアプローチをどのようにすすめていくか。新しい実践の展開がなされるよう、この二年間で模索しつつ、その第一歩を踏みたいと思います。

二〇〇六中学入試の結果及び中学一年の六クラス化について

中高入試広報主任
山田　明彦

二〇〇六年中学入試は、ここ数年間の志願者の激増、前年度の一クラス増加を受けて、四年間継続してきた午後入試をまず取りやめました。その代償も含めて二次試験を六日に設け、全四回の試験は維持して実施しました。

二回の午後入試だけで六〇％を越えていた昨年度の状況と倍率急上昇に対する敬遠を考慮すれば、今回の志願者は一〇〇〇名を越えるのはもう難しいのではないかと見られていましたが、最終総数は「一二四五名」となりました。

そして、新中一のクラス数は何とか5クラスにとどめるべく、各回の合格者数をできるだけしぼりこみ、前回に比べれば九九名も減らして手続きを待ったのですが、その人数は昨年比で三名減のみとなりました。学園小からお迎えする内部進学生は、昨年度と同じく八四名であり、新中一の合計は二二三名という人数に達しました。

模擬試験の動向や、他私学入試日程と併願状況などから、一定の予測はしていましたが、この手続き率は、想定範囲を越える高さでした。すでに次年度からの中高クラス編成と指導体制の変更に着手しており、中1におけるSクラス設置と、連動する従来の「Sクラス合格」は取りやめていました。その影響もほとんどなく、本当に多数の御家庭が本校を入学先に選んで下さったのです。

一方今回の入試でも、ごく限定の範囲で一定の優遇措置を適用しましたが、高いボーダーラインと四倍を越える競争率の中では限界がありました。「どうしても入学したい」と第一志望で長い準備を重ねられ、何度も学園へ足を運ばれ、三回も四回も受験されながら、願いを果たせなかった多数の受験生と保護者のお気持ちを心にとどめるばかりです。

校舎環境の制約はありますが、新しい振り分けでスタートする今年度中一に対する指導課題が考慮されました。そこで新入生二二三名を五クラスでなく六クラス編成とすることを決めました。また副担任の教員を三名充てました。

そのため六学年のHR教室及びレッスン教室の配置について、更に調整を加えざるを得ませんでした。特に高三理系の二クラスについては、テクノエリア一階に移動して頂かざるを得なくなり、不便をおかけしています。ここに重ねておわび申し上げます。

新中一では、「学習・生活ともに基礎・基本の徹底をはかる」との方針を掲げており、学年全体で朝読書も開始しました。従来の新入生歓迎会に加えて、生徒会主催で中三生主導による「ウェルカムパーベキュー」も行われました。五月に入り、学年の特活、部活仮入部、体育祭、そして最初の定期試験準備へと向かっています。

学園へ入って良かったと思っていただけるこれからの取り組みが問われていきます。在校生各自が居場所に恵まれ、学習や諸活動で充実感や達成感を得られるように我々一同奮闘していかなければなりません。保護者の方々とのコミュニケーションをできるだけ密にして進んでいきたいと願っています。

(1) 今年度中学1年生の総数

	男子	女子	合計
内部進学生	46	38	84
外部入学生	74	65	139
来年度中1	120	103	223

(2) 2006年中学入試-各日程の結果集計

	出願	受験	合格	実入学
2月1日A日程	230	213	60	33
2月2日B日程	345	273	59	39
2月3日C日程	374	248	73	52
2月6日二次	296	205	21	15
合計	1245	939	213	139

※欠席者の中には、本校に複数回出願され、合格以後の試験については自動的に欠席となる受験生も多数におよびます。

(3) 中学入試　応募者数・受験者数の推移

	応募者数	受験者数
1997年	1048	797
1998年	1171	877
1999年	783	560
2000年	586	410
2001年	675	440
2002年	667	514
2003年	816	562
2004年	1320	1018
2005年	1652	1309
2006年	1245	939

学校法人業務報告

四月八日の評議員会及び理事会において、寄附行為所定の手続を経て、学校法人の役員が以下のとおり選任されました。（藤岡貞彦理事・学園長は昨年十一月の理事会において選任。また、五月二十七日のPTA総会で選出されるPTA会長が理事として加わります。）

【平成十八年・十九年度】

理事長　中川　一省
副理事長　小田　拓也
常務理事　小笠原光一
〃　林　愛三
〃　山口　吉英
理事　加藤　正文
〃　橋川　聡
〃　澤地三千代
〃　高橋　慎司
〃　藤岡　貞彦
〃　古市　好文
〃　堀田　鉄男
監事　高橋　絵里
〃　林　美和
〃　山形　俊樹

【理事会開催状況】

第一三回定例理事会

三月二十五日（土）
●平成十八年度予算案について
●卒業生評議委員選任について
●その他

第一回定例理事会

四月八日（土）
●理事長・副理事長・常務理事の選任について
●その他

第二回定例理事会

四月二十二日（土）
●職員採用について
●その他

【評議員会開催状況】

三月二十五日（土）
●平成十八年度予算について
●その他

四月八日（土）
●理事選任について
●監事選任の同意について
●その他

人事報告

平成17年度退職者

石田くるみ（幼稚園）
神崎　洋輔（幼稚園）
高橋　美浩（小学校）
赤坂真由美（小学校）
松本　里奈（小学校）
児玉　友見（小学校）
池田富士夫（小学校）
トム　シサレリ（小学校）
近藤　正隆（中　高）
堀口真利子（中　高）
浦崎　麻美（中　高）
野村　江里（中　高）
北川　真代（中　高）
加藤　延幸（中　高）

平成18年度新採用者

齋藤かおる（幼稚園）
姫野貴美子（幼稚園）
井上　素子（幼稚園）
鈴木　祥子（幼稚園）
齊木　修（小学校）
四　真由子（小学校）
本庄美由紀（小学校）
フェリシア　ゴンザレス（小学校）
池田　朋子（中　高）
石原　正博（中　高）
横山　一郎（中　高）
持田　麻美（中　高）
天野美和子（中　高）
笠原　和裕（中　高）
佐倉　恭子（中　高）
杉本真理子（中　高）
村田　諭美（中　高）

今後の予定

【6月】
3日　幼　体験　体験入園（広場）
5日　中　前期中間試験（～8日）
　　高　前期中間試験（～9日）
6日　幼　年中お弁当参加保育（～9日）
　　小　6年修学旅行（～9日）
10日　幼　体験　体験入園（広場）
　　中　オープンキャンパス
13日　幼　年長公開保育（～14日）
17日　幼　体験　体験入園（広場）
　　小　外部公開授業・学校説明会
21日　幼　避難訓練（地震）
24日　幼　年少父親参加保育
　　幼　個人面談（～29日）

【7月】
4日　小　6年まとめのテスト（～5日）
6日　幼　年長合宿保育（～7日）
12日　小　のびるネ
13日　小　個人面談（～14日）
15日　幼　1学期終業の日
　　小　1学期終業式
　　中高　授業最終・大掃除
17日　小　4・5年扇外体験教室（～19日）
18日　中高　保護者面談（～20日）
23日　中高　カナダ・セミナー（～8月5日）
24日　中高　夏期講習①（～28日）

【8月】
17日　中高　夏期講習⑤（～23日）
24日　中高　夏期講習⑥（～30日）
29日　幼　1年生同窓会
31日　幼　6年生同窓会

【9月】
1日　小　2学期始業式
　　中高　避難訓練・授業開始
5日　幼　2学期始業の日